



鐵

扇

序「一振り」

男は無言で腕を振りおろす、鎚が朱の塊と交わり火花が瞬き、闇に消える
もう幾千、幾万と繰り返した、淀みなく舞うように繰り返す

此処には朝も昼も夜もない、灰と泥と鉄に塗れながら、火と風を眼前に置き、
割り、積み、叩き、延ばし、折り、重ね、そしてまた叩き

それらを繰り返し、一つの塊を、一振りの刀へと創りかえていく

脆く弱いものを、より硬く、より強く、より靱やかに、

それが、それこそが、それだけが、男にとっての絶対だった

ずっと願って望んで求めてきた、今その手応えを感じている、
表情は変わらない、しかし昂揚していた、確かな予感があった。

そうして鍛えが終わり、素延べ、火造り、切っ先をつくった。

焼刃土を纏わせて、充分に熱し、湯船に落とした、一拍の後、音を立てて水は湯になった。焼きを入れて刃文が出て、焼きを戻して粘りが出し、研ぎで艶と輝きをもたせた。

独り月明かりの下、腰を下ろし、柄拵えもしていない抜き身の刀身を立て、見据えた。

壺「少年と壮年」

暑い夏の日、少年。

15歳の夏、不自由なく育ってきた彼には目標も夢もなかった。

周囲の人は、将来は立派にだとか、良い学校に、などとよく理解らないことばかりを言う。

家出をした、何かに不満があったかと問われれば全てが不満で、裏を返せば全てが満たされていたとも言える。

若者は自転車に乗って旅に出た、手持ちの中で一番大きい鞆を持って。

何処か行きたい場所があった訳でも、何か見たい物が在る訳でも、誰か会いたい人が居る訳でも、ない。何かわからない何を求めていた。

ひたすらに道を行つた。孤独には慣れていた、寧ろ何も縛るものがない事に清々としていた。

数日が経ったある夜、山の麓で休んでいると遠くから何かの音が聞こえてきた、最初は遠雷かと思ったが、どうやら違うようだ。

音は時折止んで、また鳴る、何の音だろうかと考えている内に微睡んで眠りに落ちていた。

翌日早朝、あの音は止んでいた、ここは人里からは少々離れた場所である、

不思議に思いつつ朝食代わりのバナナを食べながら地図を見た、川に沿って細い峠道があるだけだ、人が居そうな雰囲気はない。

川辺に下りて、顔を洗い、水を濾して水筒に入れる、少し不思議に思いつつも今日中にこの山を越えてしまおうと自転車に跨る。

出発して数日、雨に降られていないことは幸運であったが、山中は朝霧に包まれていた。

12段あるギアを1番軽くして漕いでいる、時折立ち漕ぎをしながら遅々とした進みではあるが、この調子なら日が暮れる前に山を降れそうである、昼を前にして足を止めて休憩しようと思ったその矢先である、霧で道の曲率を読み違えた。

一瞬のことであった、次に気が付いた時には川辺に滑落していた。

「いててててて……」砂利の上でそう言いながら辺りを見渡す、水筒はすぐ隣に落ちていた、上方を見上げると此処から5m程のところ突き出た木に自転車が宙吊りに引っ掛かっていた、鞆の端が峠道の際にあるのが見えた其処までは大体7m程、何とか斜面をよじ登れないことはないかと思ひ身を起こそうとする、と同時に左足首に激痛、捻挫で済めば良かったのだが、落下した衝撃か落ちる過程でどうやら骨折してしまったようだ、それと幾つかの擦過傷。

近くの岩に何とか腰掛けて、水を飲み一息ついて考える、見る間に左足首は腫れ上がって1.5倍ほどの太さになってしまっていた、

人の通りがあれば声を張り上げようと思っていたが1時間経っても2時間経っても人が通る気配はなかった、

ポケットを探ると飴玉が3つと十徳ナイフ、空は曇っている。

飴玉を舐めながら耳を澄ませていると、昨夜も聞いたあの音が聞こえてきた。

飴玉も全て舐めてしまい、人通りもないまま、夕方。

何日もつだろうか、ふと頭によぎるのは「死」という単語だ、腹が鳴る、もう水しか無い。

あの音は数分おきに聞こえたり、途中30分程度聞こえなくなったりもするが、また聞こえてくる、どうやら遠くのそこには人が居るらしいが声を上げてても到底届くとは思えない。

日が暮れることに不安を抱き、痛む足をおして、小川まで這って行った。

たった数mの距離を移動しただけで、呻きながら脂汗をかいた。

水筒を水で満たし、頭に巻いていたタオルを絞って熱をもって腫れ上がっている足首に掛ける。

辺りが闇に落ちた、月明かりだけが周囲を照らす、虫の音、風の音、小川のせせらぎ、そしていつの間にかあの音は消えていた。

こんな状況でもなければ良い夜だったのかもしれない、ずっと仰向けでいるが川辺の石がゴツゴツして非常に寝心地が悪い、今日が終わってしまおう。

途端に例えようのない恐怖が襲い掛かる、寒くもない筈なのに歯の根が合わずにカチカチと鳴る、自分を抱くように肩を抱く、自然と涙が溢れ出る。

孤独には慣れていた筈だった、否、それは本当の孤独を知らなかったただけだった。

自分が凄く小さい存在だと知らしめられる、今が冬でなくて良かったなと考える。

いや、冬ならもう終わっているから苦しみが少なかったのかもしれないな、

と、思考は段々と負の方向へ傾く。

熱をもっている左足は動かさない、いや痛みに慣れて動かせるか、と勘違いし少しだけ動かしたがそれは気の所為だとも言うように激痛が走る。

深く眠ることも出来ずに翌朝川辺で浅い眠りから覚醒する、水を飲む、それ以外に出来ることはない。

上半身を起こす、左足は放り出したまま、右足を立ててそれを抱く、もしも此処でこのまま死んだら鳥か野犬に喰われるのだろうか、と不吉な想像を巡らせていると、視界の端、川上の川向こうに何か動く影が見えた、人間かと思つてそちらへと視線をうつすが・・・月輪熊だった。

小川の水を飲みに来たのだろうか、考えていたよりも現実的な恐怖に駆られ、水筒を放り出し昨日滑落した方へと後ろ向きに這い出す。

黒い影はゆっくりと小川を渡ってくる、昨日はあれだけ苦勞して移動した距離だったが苦痛が恐怖に勝つたのだろう、すぐ後ろに斜面を背負っていた。

熊は相変わらず四つ足でゆっくりとした様子ではあるが、直線的に此方に向かってくる、認識されているのは絶対だ。

ぜえぜえと荒い息を吐きながら何か無いかと焦りながら周囲の石を手当たり次第、手に取つて熊に向けて投げる、焦りか恐怖か投石は全く当たらない、

2 mほどに近づいた頃であろう、拳大の石が熊の頭部に命中した。

感に触れたのか今まで悠然としていた熊が突然に猛烈な勢いで突進してきた、なす術なく地表に押し倒され、右の肩口を押さえつけられた、

恐怖で固まっていると今まさにポケットから落ちた十徳ナイフが指先に触れた、自らを奮い立たせそのまま手に取り片手で器用に刃を出し、

渾身の力で熊の右腹に刺そうとした、

しかしその貧弱な刃では毛と皮と筋肉を突き抜くことなど出来なかった、弾かれてナイフを取り落とす。

熊が口を開けているのが非常にゆっくりと見えた、

走馬灯を見る間もなく、走馬灯に見る物もない。

終わったと思ひ、眼を閉じた。

しかしその時は訪れなかった、数瞬の後、不意に重さが消える、

右側に温かい何かを感じて恐る恐る眼を開くと赤い血に染まっていた、

但しそれは熊のものであると気づくのにもまた数瞬を要した。

俺を押さえつけていた熊の左腕がドサツと音を立てながらそれ単体で倒れた、

いつの間にかもう一つの影が現れて熊と熊の腕を切り離していた。

混乱していると腕を切り落とされ地を転がる熊に迷いなく白刃が突き立てられた。

不意に声が掛かる「おい、お前さん何やってんだい？」

興奮などは微塵も感じられない落ち着いた声で、そう問われた。

誰に掛けられた言葉か考えてしまった「あの、えっと、その・・・」

何からどう説明していいのかわからず狼狽していると、腹が鳴った。

白髪の壮年男性はそれを聞いて笑いながら言った

「腹が減ったか、そりゃ良い、自殺志願者という訳じゃなさそうだな」と、白い歯を見せる。

それを見て、安堵からか自然と涙と笑いが零れていた、しかしそこで意識が遠のく、

「おい、おい、おい、」と男が呼ぶ声だけが聞こえていた。



悪夢を見た、そして汗だくになりながら目が覚めた、夢は覚醒とともに雲散霧消してしまい、最早覚えていない。

半身を起こした、服を着ていない、体の様子を探る、左足首は固定され包帯が巻かれていた。鞆と水筒が枕元にあつた、喉の乾きを感じて水筒を開け水を飲む、温い川の水だったはずだが今は冷たい水が入っていた。

鞆の中から服を引っ張り出し四苦八苦しながら身に纏った、治療されているようだが左足首は相変わらず熱をもっている。

左足に体重を掛けないように、よろよろと壁に手をつき立ち上がり部屋の外へ出る、普通の住宅と言うよりは質素な作りの山小屋といった趣である。

居間などもあるようだが内部に人の気配はない、あの男は何処に居るのだろうと、右足だけ靴を履きおぼつかない足取りで外へ出る、目が眩む程の日が照っている、昼ぐらいであろうか。

紺の作務衣に身を包んだ白髪の壮年が何か作業をしていた、男が此方に気付いて手を止めた

「おう、起きたか」と、声を掛けてくる「気分はどうだ？」

「はい、えっと、生きています」そう返すと男は愉快そうに破顔した

「それは見りやわかる、それとも何だ此処は地獄か天国か？」

「あるいはそうかもしれません」そう言いながら、ぐうと腹が鳴る

男に、こっちへ来いと言われ、小屋に戻り昼食を共にした、

食後に茶をすすりながら、男に「さて、それで」と切り出される、

真剣な双眸で「お前は何をしていたんだ？」

そう問われ言葉に詰まる、男は続ける「命をかけるに値することか？」

「・・・わかりません」そう、一言だけ絞り出す。

「そうか、その足は治るのに1ヶ月程度かかる」男は続ける

「1週間は満足に歩けもしないだろう、少なくとも下山はその後だな」

「あの、本当に有難う御座います」陳腐な感謝が口から出る、

次いで一拍置いてから「お仕事を手伝わせて貰えませんか？」と、

「仕事、仕事か」男は不思議な表情を浮かべる、

確かに15歳の自分に出来る事などありはしないのかもしれない、

しかし、ただただ世話になることも出来なかった。

見定めるような視線で此方を見る

「ふむ、まあいい兎に角、1週間は何も出来まい、治療に専念するんだ」
優しくも厳しくもないような風に言われた、「……はい」としか答えられない。

最初の1週間は様々な話をした、歴史の事、書の事、料理の事、、、、
次の1週間で色々なものを見た、研ぎや彫り、鍛冶場、あの音の正体も理解った、
更に1週間、男の手伝いをしながら悩んだ、そして理解しようとした、
最後の1週間、思い、考えた。足は日常生活で問題ない程度には治っていた。

男が珍しく夕餉に酒を持ちだした、勧められ初めて酒を口にした。

普段から寡黙な男ではないので、この1ヶ月、本当に様々な話をきき、そして話をした。

少し酔っている男は優しい口調で「君は明日、山を降りなさい」と口にする

一瞬の沈黙、真剣な顔で黙って頭を下げ言う「弟子にして下さい、お願いします」

数瞬の沈黙、頭は上げない、「貴方は若い、此処には何も無い、多分それは若気の至りだ」

こう言われるであろう事は予感していた、未だ頭を上げずに「世界が広いのは承知しています」

男は困った様子で「教えられることなどたかが知れている、やり直しができなくなるぞ」

「それで構いません、お願いします」 「ふう……頭を上げなさい、条件が幾つかあります」

「はい！先生！」 「先生は止めて下さい」 「では、師匠」 「……まだそちらの方が良いですね」
条件は、明日下山して家に帰ること、学校を卒業すること、周囲を納得させる事、
そして五体満足で来春此处に辿り着くこと。

翌朝、引き上げておいた自転車に跨り小屋を発つ

「それでは御師様行って参ります」 「はい、気を付けて」

油切れした自転車は不満気に音を立てていたが、澄んだ青空と同じく憂いは晴れていた。

終「無銘」

あれから15年を経て師は亡くなった、それから30年の月日が経った

そして真に得心のいく一振りが出来た

刀には年号のみ、刀工の銘も刀の銘も1度たりとて入れたことはなかった

心に刻めばそれでいい、それだけでいい

無銘、刀工不詳



978XXXXXXXXXX



192XXXXXXXXXX

猫のpochi

画:眼鏡 題字:かくのおん